アジア・アフリカ地域研究 第22-2号　2023年3月
Asian and African Area Studies, 22 (2), 2023

書　　評

山口亮太.『妖術と共にあること―カメルーンの農耕民バクウェレの民族誌』明石書店，2022年，258 p.

近藤英俊 *

広くアフリカにおいて，妖術使いであることを疑われるのは，しばしば親密な間柄にある者である．ひとつの屋敷の中で妖術使いと暮らすのは珍しいことではない．愛する相手が自分の命を脅かしかねない存在ということもある．外部の研究者にとってこの点を理解するのは容易ではない．そのためには，妖術使いの主体性，自己や人格といったものについて深く吟味する必要があろう．本書はカメルーンのバクウェレの人々の民族誌的研究をとおし，まさにこの課題に取り組んでいる．

本書は以下の構成をとっている．第1章「『妖術＝呪い』を解きほぐす」，第2章「熱帯林に住むバクウェレ」，第3章「エリエーブを持つ者の身体―その獲得と操作」，第4章「病と自己の語り方」，第5章「誰が道路を止めたのか―道路修復工事にみるエリエーブと発展」，第6章「ヒトと動物の連環」，第7章「エリエーブと共にあること」．

第1章は，2人のバクウェレの若者のお気楽な妖術を巡る会話から始まる．著者を前にして一方が他方が空を飛べるというと，他方がそれを認めるというものだが，冗談かと思いきや，彼らは本当にそう思っている．これまで妖術研究は，人を攻撃し食べるといった「恐ろしげな」ものとして捉えてきた．これにはエヴァンズ＝プリチャードの研究の影響が多分にある．エヴァンズ＝プリチャードは，妖術を，不運を説明する「不運という状況の関数」，並びに対立や不和など人間関係上の問題に起因する「人間関係の関数」として理解した．本書の第一の課題は，これらの文脈から妖術研究を解放することにある．本書の第二の課題は，妖術使いの主体や自己について理解を深めることにある．本書は妖術使いを，妖術のサブスタンス，バクウェレがエリエーブと呼ぶものと，それを持つ者との二重性において理解する必要性を説く．そして第三の課題は，妖術が人間以外の存在とも関わっていること，すなわちエリエーブが人間と動物を往還する壮大なコスモロジーについて明らかにすることにある．

第2章では，調査の経緯や調査地までの道のりが紀行文風に描かれている．バクウェレはカメルーン東南部とコンゴ共和国北部の熱帯雨林地帯に住むバントゥー系の農耕民である．調査地のバクウェレはジャーコとエセルという2つのグループに分かれる．両者は共存してきたが道路の建設を巡って軋轢を抱えている．バクウェレにとって最も基本的な社会は，父系親族ンビャクである．ここで本章は個人名に関し，ンビャクの祖父母の世代の人物の名前を付ける慣習に注目する．個人は名前を先人と共有する．いいかえれば個人名は他者性を帯びている．

第3章はエリエーブを持つ者の特徴を吟味する．エリエーブを持つ者の大半は，生後

* 関西外国語大学外国語学部

間もなく他人のエリエーブが感染している．誰から感染したのかわからない．それは腹部に収まり，追い出すことはできないが，その一方で持ち主の身体を離れ彷徨うこともある．エリエーブ同士が遭遇すると争いになるという．エリエーブは，特定の状況では必ず特定の行動をとるよう持ち主に強いる．車を買おうと貯金すると，いつも酒と女に溺れ文無しになってしまうのは，エリエーブの仕業である．このとき持ち主は行為の主体という地位を剥奪されている．エリエーブは他人からもらい，なおかつ持ち主に命令するという意味で，持ち主に二重の他者性を与えている．エリエーブの持ち主は，不思議な力や身体能力を授かっているとみなされる．「エリエーブを持つことでその人物がアクセスできる世界は拡張される」(p. 90)．エリエーブが活動する世界は不可視の世界である．エリエーブがもし見えたら，あるいはその呼びかけに応じたなら，殺されるといわれている．また，エリエーブの持ち主は嫉妬深く，ケチで人嫌いであるともいわれる．しかし新生児は常にエリエーブに感染する可能性があり，潜在的には誰もがエリエーブの持ち主である．バクウェレは「エリエーブと共にある」．

第 4 章は 5 章とともに本書の中核を成す．病が一般に知られた経過を辿らない場合，つまり「出来事の推移の異常性」がある場合，バクウェレは原因として妖術を疑う．人々は妖術について語るのだが，本研究が興味深いのは，妖術の語りが語り手の間で一様ではない事実を捉えている点にある．妖術経験は誰も認めるようなひとつの物語に収束しない．複数の物語が調停されず宙づりのままになる．それはまた当事者の自己の複数化の過程でもあるという．本章では 3 つの事例を詳細に報告している．

ひとつ目は 30 代の足が動かない女性の事例である．このケースでは，原因に関する見解が，治療を受けた教会，呪医そして当時者の間で食い違っている．それは彼女が何者であるかという，彼女の自己に関する見解の相違でもある．2 つ目は，長期間倦怠感と腹痛を患った後，亡くなってしまった知人のケースである．このケースにおいても，原因を巡って人々が着目する出来事は多様であり，妖術の物語は共通項があるとはいえ錯綜している．3 つ目は，不可解な出火によって火傷を負った知人のケースである．このケースにおいて当事者は占いをとおし自らのエリエーブ，そのエリエーブを持つ自分，さらに周囲のエリエーブを持つ者たちと向き合うことになる．このように妖術の物語が複数化することを，本章では複数の医療資源に応じた解釈や，症状の推移と関連づけているが，人々の対立を含む関係が彼らの観点に影響を及ぼす点も無視できない．「人間関係の関数」を完全に否定する必要はないだろう．

第 5 章は，複数の妖術の物語が集会の席上，参加者のやり取りの中で顕わになっていく過程を辿った貴重な記録である．開発の遅れたバクウェレ地域だが，外国企業が伐採した木材を運搬するために道路を建設，一度はドンゴ村まで道路が完成した．ところが伐採会社の倒産などから道路は未整備のまま放っておかれた．ようやく道路修復工事が始まる

も，重機が故障し，カントン長のいるアジャラ村より先の工事が中断してしまう．しかし人々は道路工事とその中断をエリエーブと結びつけて語る．集会は工事の中断がババルという人物のエリエーブによるものという噂を受けて開かれた．ところが集会をつうじ，4つのエリエーブの物語が顕わになる．紙幅の関係から個々の物語の内容は割愛する．興味深いのは，一連のやり取りにおいて参加者がエリエーブを公共性に資するものとしても語っている点である．本章はエリエーブを身体的性と道具性の観点からの分析を試みるが，これについては最後に検討する．

第 6 章はエリエーブと人間以外の存在との関わりについて探っていく．そこで見出されるのは「人間と動物の個体の生命の長さを越えてつながる巨大なライフサイクル」（p. 198）であり，「その中をエリエーブが巡っている」ことである．バクウェレと動物の関わりは物理的関係にとどまらない．人，動物，それにエリエーブを加えた 3 者の間には宗教的な関わりもある．父系親族ンビャクには親族ごとのトーテム的な動物が存在し，親族のメンバーはその動物を食べることが禁じられている．エリエーブは人の死後，動物に転生することがあり，森の中には人間のエリエーブが転生した動物がいると信じられている．したがってエリエーブは誕生して間もなく他人から感染し，死とともに動物に転生する．一方人格は父系親族に沿って一世代おきに同じ名前を持つ人物に受け継がれると同時に，エリエーブをとおし動物に受け継がれる．人格はこの二重の意味において転生する．

第 7 章はこれまでの議論を振り返ったうえで，自己や人格の複数性という視点の汎用性について示唆する．

本書が妖術に関する新たな研究領域を開拓しようとしている点は大いに評価したい．今後の課題は，エリエーブとそれを持つ者の二重の主体性，エリエーブを巡る語りの複数化，人，エリエーブ，動物の転生のコスモロジーが，相互にどのように連関しているのかを明らかにすることだろう．この点に関連して，最後に少しばかり整理すべき点を指摘したい．

5 章において，エリエーブがさまざまな出来事に結びつく究極の原因は，エリエーブの身体性と道具性の往還に求められている．しかしこの議論は少々わかりづらい．身体性と道具性については，眼鏡を例に巧みに説明されている．眼鏡はものをよく見るという通常の使用においては，その所作が習慣化されていて身体の一部のようになっている．これに対しつるの部分で頭を掻くなど，普段使いから逸脱する際は，意識的意図的に使用者は眼鏡に臨むことになる．前者が眼鏡の身体性であり，後者が道具性である．眼鏡の使用はときに身体性と道具性を往還する．ところが眼鏡の場合，語りをとおしてさまざまな出来事に結びつくようなことはまず起きないだろう．それではエリエーブは，なぜかくも多様な出来事と結びつき，物語を複数化するのだろうか．身体性と道具性の往還というだけでは説明がつかない．

エリエーブの身体性といったとき，身体の一部として普段は気づかないことを単に指し

ているのであって，眼鏡にあるような独自の身体化した所作があることは想定されていない．問題はエリエーブについて語られその道具性が顕わになるのは，エリエーブ自体の身体性からの逸脱ではない点にある．それは何か特定の常識化し身体化した事象からの逸脱である必要は一切ない．普段は強く意識することもない当たり前の事象であれば何であれ，そこからの逸脱は不可解であり，十分エリエーブを想起しうる．エリエーブがさまざまな出来事と結びつくのは，これらの出来事が、そうある必然性を欠いた不可解な偶然的事態であり，必然的事象の裏面としてこの世界に遍在することに由来するのではなかろうか．

粕谷祐子編．『アジアの脱植民地化と体制変動―民主制と独裁の歴史的起源』白水社，2022 年，510 p.

水谷　智 *

今日我々は，「国民国家」が人類社会の基本的な構成単位であることが当たり前の世界に生きている．しかし，わずか 70 年ほど前まで，地球上の多くの人々は主権をもたない従属的な立場におかれていた．20 世紀のアジア地域においては，みずからが他民族を支配する側にまわった日本を除けば，そのほぼすべてが植民地化の対象になった．外国勢力からの「独立」「解放」をへてこの地域に多くの「国民国家」が生まれたのは，主に第二次大戦以降であり，それからまだ 1 世紀も経過していない．こうした国々のあり方を考えるにあたって，植民地主義と脱植民地化の双方の歴史を考えることはいまだに極めて重要である．

だが，アジアという地域の全体について研究をおこなうことは容易ではない．まず，この地域は，言語・宗教・文化の面で極めて多様である．そして，オランダ，イギリス，フランス，アメリカ，日本など，さまざまな「国民国家」がそこで競うように植民地化を展開したことがさらにその多様性を複雑なものにした．この地域でどのような支配がおこなわれ，またそれにたいしてどのような抵抗運動が展開されたかについて，ひとりの研究者が詳細な実証研究をおこなうことはできない．本書は，編著者である粕谷祐子氏のリーダーシップのもとに，アジア各国の政治（史）を専門とする第一線の研究者が参集しておこなわれた共同研究の成果である．研究対象としているのは，東・東南・南アジアに位置している 17 の国々である．

現代においては一見バラバラで多様にみえるこうした国々の共通の歴史経験として植民地主義への抵抗とそれをとおした国家建設に着眼しているのが本書の特色である．本書では，第二次世界大戦後から 1950 年代までが脱植民地化の時期として研究対象に設定されている．粕谷氏によれば，この時期こそが歴史上の「重大な岐路」（critical juncture）として重要である．すなわち，「『脱植民地化』の時点を分析することは，アジア政治を体系的に理解するうえで重要かつ効果的な視角だというのが本書の立場である」（pp. 26–27）．

* 同志社大学グローバル地域文化学部